

深まるとは

甲「私は長い間、み法を聞かしていただきましたのに、どうも少しも進んでくれない心がするのでございます。他のお方々を見ますと、ずんずん進んでお行きになる気がいたしますのに、私は仏法の器でないのかちつとも皆様のように深まってくれないのでございます。どうすれば深まるのでございませうか。」

乙「そうですね、それであなたには疑いがあるのですか。」

甲「疑いなどはございません。お念仏も申しております。」

乙「それではどこが気に入らないのです。」

甲「深まってくれないのです。何も得たような気がしなくなつたのです。以前にはもつと感激もあつたようでございますが、今では何だかもとの凡夫のままになつたようです。聞けば聞くだけそんな気がしてなりません。」

乙「あなたのようなことを言つて先日もお手紙を受け取りました。あなた一人ではないのです。一緒に考えてみましょう。」

甲「お聞かせくださいませ。なぜ私はみなさまのように深まってくれないのでしょうか。」

乙「深まる？ おかしいことを言いますね。十八願絶対他力の世界に深まるの浅くならぬ、進むの進まないのということがあるでしょう。私もそのように考えていたことがあつたのです。しかしそうした考えは、凡夫相対のはからいから生み出したものです。若不生者と誓つた如来の大願海には深まるの進むのというようなことを考えたり加えたりする余地はないのです。私だつてちつとも進んだ気もしなければ、深まつた気もいたしません。いな、かえつて私の根深い業障こそ年々に根を張り枝を繁らせてゆくのに、その進み方におどろいています。しかし信仰の点になるとお話になりません。深まるどころか進むどころか……まことにおはずかしいことです。清さなどは一度にふきとばすような醜い心が底もなく動いています。どうやら、あなたと同じであるようです。」

甲「まあ先生もですか……私どもが伺いますと、先生などは日に日に深くお進みになるように存じますが……」

乙「そうですね、常の私はそれとは反対です。しかし私は深まろうとか、進まねばならぬとか、そうしなければならぬとか考えていませぬ。それよりも、如来の大悲懐の真髓より響きたもう招喚のみ声を聞かせていただくことを気づかせてもらつただけです。」

『安心決定鈔』を拝読いたしました。こんなことが書いてあります。

『ひとのおもえる念仏は、こころには浄土の依正（依報、正報ということ、正報とは如来自体であり、依報とはその成就の浄土のこと、ともに本願に酬報してできたもの）をも観念し、くちには名号をもとなうるときはばかり念仏はあり、念ぜずとなえざる時は念仏もなしとおもえり。このくらしいの念仏ならば、無為常住の念仏とはいがたし。となうるときはいでき、となえざるときはうせば、まことに無常転変の

念仏なり。序題門に、法身常住比若虚空と釈せらるるも、かのくにの常住の益をあらわすなり。かるがゆえに、極楽を無為常住の国というは、凡夫のなすによりて、うせもしいできもすることのなきなり。念仏三昧もまたかくのごとし、衆生の念ずればとて、はじめていでき、わするればとて、うする法にあらず……………」

よくよく味わつて見ようではありませんか。

念仏する時だけ念仏があつたり、深まつたら如来がはつきりつかめたので、道心もさめ、念仏も大儀であつたりする時には如来がかくれたように思う、それくらいの世界にいたのでは『凡夫のなすによりて、うせもし、いできもすることのなきなり。』とは申されません。仏の世界の廣大無辺を虚空にたとえてあります。虚空！虚空の大きさに何をたします。虚空にむかつて何を深めます。何をたします。われらの信樂はただ如来の絶対のみ胸によつて成り立つのです。本願によつてのみ成り立つのです。ただ、撰取のみ力によつて成り立つのです。何を私が深めましょう。何を私がつたしましょう。無限絶対の大信心海こそすぐそのままわれらの生きる世界であります。仏と凡夫とそれだけで……………その間に何を入れましょう。深いのは仏の大信心海です。凡夫の煩惱の海です。この底なき煩惱と信心とが一つに食い入つてはなれないこと炭と火のごとであります。まだ深めますか。」

甲 「おそれ入りました。……………しかし私の心はけつして深いものを深いとも味わつてくれず、まことに毎日々々を煩惱に使われてのみ生きています。」

乙 「どうかその心で求めさせてくださいまし。私はこれくらい深まつた、これだけ進んだと、気取ることができ、『だれだれの信仰は現実に生きていない。』そんな心持が出はじめた時、もうりっぱな化城にたてこもつて、いきいきした信の世界からは遠ざかり、目もあてられぬ高慢な世界に、われと如来を忘れた時であります。深まつた、高まつた、進んだなどと、さびしい世界には深まつて（？）くださいますな……………それですと、『悪性さらにやめがたし』と泣き、『悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることよろこばず、真証の証に近づくことを快しまず、愧ずべし、痛むべし。』と泣いたご開山の世界とはお別れになります。『得たと思うは得ざるなり……………』と言われたのは蓮如上人です。他人は他人です。あなたはあなたです。如来の撰取のみ心をほかにして何を深めましょう。ただちに如来の大信心に直参すべきです。如来の撰取以外に、凡夫の功をほこつてはなりません。よき心のおこらせられるも、悪きことに心づくのも、ともに他方であります。私どもはすべての所に腰かけないで、白道を歩ませていただきますしう。ただありのままのただ中に。」